

和類虚詞の意味——人物を導く介詞

干野真一

0. はじめに

本稿では中国語における前置詞（以下、介詞と称する）について考察する。介詞は目的語と共に連用修飾語を構成し、その役割は、述語で表現される内容がどのような場面・状態において実現されるかを導くことにある。本稿では介詞の中でも“與、和、同”について考察する。これらの主要な働きは人物関係について言及することである。以下に具体例を挙げる。

- (1) 秦氏笑道：“不怕他惱，他能多大呢，就忌諱這些个？上月你沒看見我那个兄弟來了，虽然**与**宝叔同年，两个人若站在一处，只怕那个还高些呢。”（紅樓夢・庚辰本/5¹）
- (2) 他因仗着宝玉**和**他好，他就目中無人。他既是這樣，就該行些正經事，人也沒的说；他素日又**和**宝玉鬼鬼祟祟的，只當人都是瞎子看不見。（紅樓夢・庚辰本/10）
- (3) 这里賈珍**同**一家子的弟兄子侄吃過了晚飯，方大家散了。（紅樓夢・庚辰本/11）

(1)~(3)の介詞目的語はいずれも人物であり、主語と共にどのように述語の内容を構成しているかを表している。主語と介詞目的語が意味的にどのように結びついているかが本稿の考察対象である。

また、これらの介詞は“共、并、跟”などと併せて「和類虚詞」と総称されることもあり²、用法に互換性がある類義語である。例えば(1)の“與”について、「程甲本」では(4)のように“和”を用い、さらに(2)については、「程甲本」では一つ目の“和”を“同”とする(5)など、版本間に異同が確認される。

- (4) 秦氏笑道：“暖哟，不怕他惱，他能多大了，就忌諱這些麼？上月你沒有看見我那個兄弟來了，虽然**和**寶叔同年，兩個人若站在一處，只怕那一個還高些呢。”（紅樓夢・程甲本/5）
- (5) 他因仗着寶玉**同**他相好，就目中無人。既是這樣，就該行些正經事，也沒的说；他素日又**和**寶玉鬼鬼祟祟的，只當人多是瞎子看不見。（紅樓夢・程甲本/10）

このような異同は介詞間の互換性、すなわち用法としての重複部分があることを示唆するものである。本稿では、用法上の重複が比較的顕著に見られる明清期の白話小説から用例を採り、これらの「和類虚詞」が共通して有する意味的な基盤とは何かを検討する³。

1 用例の出典は「(作品名/回)」と示す。なお、『紅樓夢』について版本を明示しない場合は「庚辰本」であることを表す。

2 「和類虚詞」という表現を用いた先行研究には、于江1996bや趙金枝2007、高育花1998、曹煒2007等がある。

3 「和類虚詞」という表現には連詞用法も含まれるが本稿では介詞用法を中心に考察を行う。

1. 先行研究と問題提起

和類虚詞については、既に多くの詳細な研究成果がある。それらの先行研究は来歴を明らかにし、文法化という視点から通時的な発展を追っている。

来歴については于江1996a、1996bに詳しく、“與・和・同”の原初的な用法から介詞用法の成立が報告されている。Liu Jian & Alain Peyraube 1994、呉福祥2003においては、“語法化鏈”(grammaticalization chain)という視点から、「動詞→介詞→連詞」という一連の文法化のプロセスが提示されている。呉福祥2003では、さらに「和類虚詞」には全て“伴随動詞”としての来歴があることが指摘されている。“这样我们可以发现、上文所讨论的“和”类虚词都有一个相类似的语义基础、换言之、汉语史上所出现的“和”类虚词都无一例外地源于伴随动詞。”(呉福祥2003)

また、用法を詳細に整理した先行研究も豊富であり、主要なものとして馮春田2000や馬貝加2002が挙げられる。現代中国語でも傅ら1997の報告などがある。各先行研究における具体的な用法の種類については第二章において詳しく検討する。

これらの研究を足がかりとして、本稿は、類義語として——時には同義語としてすら——認識されている和類虚詞“與、和、同”が有する共通の意味について考察する。

和類虚詞の意味・機能の共通性に関連して、以下のような表現が散見する。

介詞“与”表共同，相当于介詞“同”“和”。

介詞“和”表共同，义同“同”“跟”。

介詞“同”表关联的对象，表共同，有“跟”“和”之义。(许仰民2006より)

これらは『金瓶梅詞話』に見られる“與、和、同”について述べたそれぞれの箇所を抜粋であるが、各介詞の意味および役割には互換性とも言える共通部分が多いことがうかがえる。また、香坂1987:353でも「現代中国語では“與”は書面語、“和”は口頭語と比較的はっきり区別されるものの、この時代では均質なものとみられる。」との指摘があり、『水滸傳』の時代における“與、和”の意味的均質性が報告されている。現代語でも“跟、和、同”について“这三个词功能基本上相同”という記述がみられる(朱德熙1982:176)。以上を統合すれば“與、和、同、跟”の意味的重複、共通性が伺えよう⁴。それぞれの語彙の来歴は異なり、内包する意味の総和は異なるものの、言語現象として、類義語関係にある複数の介詞が同じ事象を表わすのに使われている。

先行研究を踏まえ、筆者の関心は以下の3点に集約される。

- 1、和類虚詞は幾つの意味に捉える必要があるのか。
- 2、和類虚詞はどのように役割分担をしているのか。
- 3、和類虚詞が表している意味とは何か。

1については、先行研究で細分されている用法について、和類虚詞の意味的な共通基盤という観点から、幾つの意味に大別するべきかを検討する必要があると考えられる。第二章において先行研究を踏まえて考察する。

4 “跟”については本稿では考察対象外とする。本稿で考察する明清期の語彙資料において“跟”は基本的に動詞として用いられている。

2については、用法に共通性のある複数の介詞がどのように「役割」を分担しながら和類虚詞としての全体を為しているのか、明清期の白話小説三種における使用状況から地域性や言語環境ごとの特徴を考察する。

そして、1および2についての検討を経た上で、和類虚詞が表している共通の意味について考察する。和類虚詞は汎用性の極めて高い介詞群であると言え、これまで仔細な用法分析がなされている。その一方で、介詞間での互換性が確認されることから伺えるように、実際に言語を使用する場においては、より大まかな「くくり」でとらえているものと考えられる。和類虚詞全体をどのようにとらえることがより実際に即した理解につながるのか検討したい。

次章では、先ず1の問題を解決するために、どのような基準で和類虚詞を捉えるべきか、先行研究の再整理することでその尺度を提案する。

2. 4つの尺度

和類虚詞は先行研究において詳細に分析され、その用法は多岐に渡るものである。ここでは馬貝加2002と曹煒2007、さらに『現代漢語八百詞』⁵における用法の分類を確認する。以下の表1は、“與、和、同”それぞれの用法分類についてまとめたものである。

表1 「和類虚詞」の先行研究に見られる用法の分類

	與（与）	和	同
馬貝加2002	涉及者、接受者、言談者、交与者、施事者、所为者所替者、求索者、比较者	言談者、所为者所对者、求索者、连带、强调、交与者	交与者
曹煒2007	受事、偕同、受益、对象、比较、使令、强调	偕同者、对象、伴随者、比较者、受益者	偕同者、对象、比较者
『八百詞』	跟。用于书面。 ⁶ （表示共同、协同。 指示与动作有关的对方。 表示与某事物有无联系。 引进用来比较的对象。）	表示共同、协同。 指示动作的对象。 表示与某事物有联系。 引进用来比较的对象。	表示共同、协同。 引进动作的对象。 表示与某事有无联系。 引进用来比较的对象。

馬貝加2002および曹煒2007は、近世中国語における介詞としての用法について、各語彙が表す意味から分類したものである。具体的な挙例については割愛するものの、一見して詳細な分類であることが看取されよう。また、現代中国語研究において“與、和、同”の介詞用法は『八百詞』に見られるように、4つの基準から分類されることが多い。用法を

5 傅ら1997に見られる用法分類は『八百詞』をベースとしたものである。

6 ここでは以下に「跟」（介）の項目における記載を抜粋する。

分類する際に使用される用語は先行研究によりまちまちであるが、馬貝加2002における用語からも類推される通り、これらは結局のところ、述語のタイプによって分類がなされていると言える。

そこで本稿では各分類についての比較考察を行い、述語のタイプを念頭において主語と介詞目的語の関係から「A：共同、B：相互、C：単方向、D：関係性」という4つの基準による分類を試みる。具体的には“S和类虚词N(V)”という構造において、述語がそれぞれ「SがNと共同で行うもの」、「SがNと相互に行うもの」、「SがNに対して(単方向に)行うもの」、「SについてNとの関係性をあらわすもの」となっている。本稿の「関係性」用法は『八百詞』の3つ目と4つ目の用法の両方を含むものである。

次章では、それぞれの用法について、具体的な用例からさらに考察する。

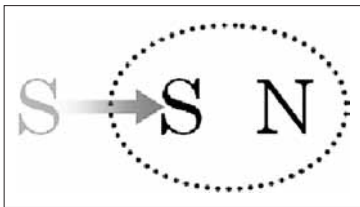
3. 各用法の検討

3.1 A：共同

「共同」用法は“S和类虚词N(V)”という構造において、述語は動詞であり「SがNと共同で行う」ものである。通常、Sが単独でも行うことが出来る動作であり、それをNとともに実行している。以下、具体例を確認する。

- (6) 這李氏帶了一百顆西洋人珠，二兩重一對鴉青寶石，同養娘媽媽走上東京投親。(金瓶/10)
- (7) (薛姨媽)日同代玉、迎春姊妹等一处，或看書下碁，或作針黹，到也十分樂業。(紅樓/4)
- (8) (鄒吉甫)又叫同三捧著一瓶酒和些小菜送在船上，同二位少老爺消夜。(儒林/9)
- (9) 每日遲出早歸，不要同人吃酒。(金瓶/2)
- (10) 襲人笑道：“这是那里話？讀書是極好的事，不然就潦倒一輩子，終久怎麼樣呢？但只一件：只是念書的時節想著書，不念的時節想著家些。別同他們一处頑鬧，碰見老翁不是頑的。(紅樓/9)
- (11) 母親自同媳婦在廚下造飯。(儒林/3)
- (12) 却說西門慶，那日同應伯爵、謝希大兩個，家中吃了飯，同往燈市裡遊玩。(金瓶/15)
- (13) 那僧道：“正合吾意。你且同我到警幻仙子宮中將蠢物交割清楚，待這一干風流孽鬼下世已完，你我再去。如今虽已有一半落塵，然猶未全集。(紅樓/1)
- (14) “我如今同了幾個大本錢的人到省城去買貨，差一个記賬的人，你不如同我們去走走，你又孤身一人，在客夥內，還是少了你喫的、穿的。”(儒林/2)

図1



“同”については、(12)から(14)において述語“往、到、去”となるなど「移動義」を表す述語動詞と共によく用いられる傾向がある。

このことは大内田1987にも指摘がある⁷。この「共同」

7 「同」を介詞として用いた例について、『述語動詞は「来」「回…来」「到」「上…去」など移動を表す動詞が多いので、「同」の賓語となる人とある場所に同行する場合が多い。』と述べている。(p.130)

用法について、“S 和类虚词 N (V)” という表現形式で表わされるSとNの関係については、図1のように図示することが可能である。点線で囲んだ楕円を「述語が実現する場」と仮定すると、SはNとともに一つの「ユニット」を形成し、動作を行うこととなる。

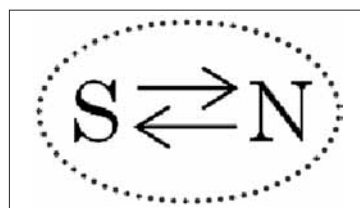
3.2 B：相互

「相互」用法は“S 和类虚词 N (V)” という構造において、述語が「SがNと相互に行くもの」など、複数名の動作主が存在することで成立する動作となるものである。以下、具体例を確認する。(15)や(24)に見られる述語動詞は複数人数で行う「ゲーム」である。また、(16)や(19)の“認識”や“相見”はSがNと会うことで「お互いに」実現する動作であり、(17)の“閑談”や(22)の“商議”、(23)の“説説笑笑”といった動作も複数の動作主が想定される。

- (15) 吳月娘還與李嬌兒、西門大姐下棋。孫雪娥與孟玉樓却上樓觀看。(金瓶/19)
- (16) 這小小之家，乃本地人氏，姓王，祖上曾作过小小的一个京官，昔年与鳳姐之祖王夫人之父認識。(紅樓/6)
- (17) 每日或飯後或晚間，薛姨媽便過來，或与賈母閑談，或与王夫人相敘。(紅樓/4)
- (18) 嚴致中道：“前日纔到，一向在都門敝親家國子司業周老先生家做居亭，因與通政范公日日相聚。”(儒林/18)
- (19) 武大道：“兄弟去了早早回來，和你相見。”(金瓶/2)
- (20) 宝玉忙要趕過來，宝釵一把拉住道：“你別和你媽媽吵纔是！他老糊塗了，倒要讓他一步為是。”(紅樓/20/)
- (21) 胡屠户道：“…想着先年，我小女在家裏長到三十多歲，多少有錢的富戶要和我結親！我自己覺得，女兒像有些福氣的，畢竟要嫁與个老爺，今日果然不錯！”(儒林/3)
- (22) 李四道：“…這位學道的關防又嚴，須是想出一个新法子來。這事所以要和三爺商議。”(儒林/19)
- (23) 金有餘也稱謝了眾人，又吃了幾碗茶。周進再不哭了，同眾人説説笑笑回到行裏。(儒林/3)
- (24) 李瓶兒同西門慶猜枚。(金瓶/16)

図2

以上の用法から“S 和类虚词 N (V)”におけるSとNの関係、さらには「互いに実現する動作」という点に注目して図示を試みたものが図2である。図2においてSはNとともに点線内におり動作を行うが、その動作は矢印で表される通り、双方向のものである。



3.3 C：単方向

続いて「単方向」の用法は“S 和类虚词 N (V)” という構造において、「SがNに対して(単方向に)動作を行うもの」である。例えば、次の(25)においては武松に対して「お祝い」が述べられている。

- (25) 眾里正大戶都來與武松作賀慶喜，連連誇官，吃了三五日酒。(金瓶/1)

「與」に関しては、(25)を含め(26)や(30)、(31)などNに対して「あいさつ」を行うものが多い。「あいさつ」は相互的なものにとらえられがちであるが、(26)や(38)においては明らかにSの動作

のみを言及しており、「単方向」用法である。

(26) 金蓮先與月娘磕了頭，遞了鞋腳。月娘受了他四禮。(金瓶/9)

また、(28)に見られる“與我遞酒”については、一般に“(拿/將/把)酒遞與我”という語順をとる場合が多い。(32)においては、SがNを近く呼び寄せて「話をする」ため、Nに向けて動作を行うことが顕著である。また、(33)の“説”は「話すこと」が「要求すること」を表す例である。

(27) 那吳月娘聽了，與他打了箇問訊，說道：(金瓶/13)

(28) 西門慶哄道：“我那裡教他！”于是隱瞞不住，方纔把李瓶兒“晚夕請我去到那裡，與我遞酒，說定過你每來了。(金瓶/16)

(29) (薛姨媽)又私與王夫人說明：“一应日費供給，一概免却，方是處常之法。”(紅樓/4)

(30) 金榮強不得，只得與秦鐘作了揖。(紅樓/9)

(31) 周進看那人時，頭戴方巾，身穿寶藍緞直裰，脚下粉底皂靴，三綵髭鬚，約有三十多歲光景，走到門口，與周進舉一舉手一直進來。(儒林/2)

(32) 却不想玉樓在翫花樓遠遠瞧見，叫道：“五姐，你走這裡來，我和你說話。”金蓮方纔撇了經濟，上樓去了。(金瓶/19)

(33) 王夫人笑指向代玉道：“這是你鳳姐姐的屋子。回來你好往這裡找他來，少什麼東西你只管和他說就是了。”(紅樓/3)

(34) 那焦大那里把買蓉放在眼里？反大叫起來，趕著買蓉叫：“蓉哥兒，你別在焦大跟前使主子性兒！別說你這樣兒的，就是你爹、你爷爷，也不敢和他挺腰子。(紅樓/7)

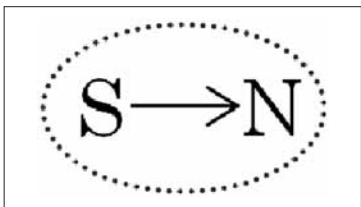
(35) (秦老)因自小看見他長大，如此不俗，所以敬他愛他，時時和他親熱，邀在草堂裏坐著說話兒。(儒林/1)

(36) 兩公子和他施禮說道：“吉甫，你自恁空身來走走罷了。為甚麼帶將禮來？”(儒林/11)

(37) (胡屠戶又吩咐女婿道：)“…若是家門口這些做田的，扒糞的，不過是平頭百姓。你若同他拱手作揖，平起平坐，這就是壞了學校規矩，連我臉上都無光了。…”(儒林/3)

(38) 馬二先生大喜，當下受了他兩拜，又同他拜了兩拜，結為兄弟。(儒林/15)

図3



以上、「単方向」の用法では、“S 和类虚词 N (V)”において、Sが動作VをNに対して(一方的に)行うものであり、図3のように図示が可能である。

3.4 D：関係性

最後に「関係性」の用法は“S 和类虚词 N (V)”という構造において、「SについてNとの関係性をあらわすもの」である。例えば(39)では、SとNの地理的な位置関係について説明している。

(39) (知縣)便道：“雖是陽谷縣的人氏，與我這清河縣只在咫尺。”(金瓶/1)

その他の述語には“一般”や“不同”といった比較した結果を述べるものや、“無干”などの関連性を述べるもの、さらには人物同士の間柄や親密度について言及するものがある。

(40) 那婆子舊性不改，便跳起身來喝道：“你這小猢猻，老娘與你無干，你如何又來罵我？”

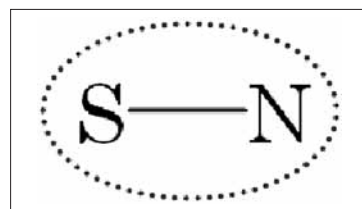
(金瓶/5)

- (41) 那街坊鄰舍上戶人家，見武二是個有義的漢子，不幸遭此刑，平昔與武二好的，都資助他銀兩，也有送酒食錢米的。(金瓶/10)
- (42) 西門慶道：“他與大房下都同年。”(金瓶/13)
- (43) 正尋思從那一件事自那一个人寫起方妙，恰好忽從千里之外，芥荳之微，小小一个人家，因與榮府畧有些瓜葛，這日正往榮府中來，因此便就這一家說來，到還是頭緒。(紅樓/6)
- (44) 宝玉听了，方略有些喜意。細問原由，方知賈雨村亦進京陛見，——皆由王子騰累上保本，此來後補京缺，——與賈璉是同宗弟兄，又與代玉有師徒之誼，故同路作伴而來。(紅樓/16)
- (45) 嚴振先只得混賬覆了幾句話，說：“趙氏本是妾扶正，也是有的；據嚴貢生說，與律例不合，不肯叫兒子認做母親，也是有的。”(儒林/6)
- (46) 當晚武大挑了担兒歸來，也是和往日一般，並不題起別事。(金瓶/5)
- (47) (官人)說道：“武二，你休聽外人挑撥，和西門慶做對頭。”(金瓶/9)
- (48) 平兒素知鳳姐與秦氏厚密，虽是小後生家亦不可太儉，遂自作主意，拿了一疋尺頭，兩個“狀元及第”的小金鏢子，交付与來人送過去。(紅樓/7)
- (49) 鶯兒嘻嘻笑道：“我听這兩句話，到向和姑娘項圈上的兩句話是一对兒。”(紅樓/8)
- (50) 賈環道：“我拿什麼比宝玉呢？你們怕他，都和你好，都欺負我不是太太養的！”(紅樓/20)
- (51) 夏總甲道：“…。顧老相公請他在家裏三个年頭，他家顧小舍人去年就中了學，和咱鎮上梅三相一齊中的。”(儒林/2)
- (52) 張鄉紳道：“適纔看見題名錄，貴房師高要縣湯公，就是先祖的門生。我和你是親切的世弟兄。”(儒林/3)
- (53) 月娘道、“二娘，不是這等說。我又不大十分用酒，留下他姊妹兩個，就同我這裡一般。”(金瓶/15)
- (54) 賈珍便忙向袖中取了寧国府的對牌出來，命宝玉送與鳳姐，又說：“妹妹愛怎樣就怎樣，要什麼，只管拿這個取去，也不必問我。只求別存心替我省錢，只要好看為上；二則也要同那府里一樣待人纔好，不要存心怕人抱怨。”(紅樓/13)
- (55) 鳳姐笑道：“好兄弟，你是個尊貴人，同女孩兒一般人品，別學他們猴在馬上。下來、僭們姐兒兩個同車豈不好？”(紅樓・程甲本/15)
- (56) (周進道：)“…梅朋友說，自己的名字叫做‘玖’也替他起个‘王’傍的名字發發兆，將來好同他一樣的意思。”(儒林/2)
- (57) 范進道：“方纔門人見過，他是高要縣人。同敝處周老先生是親戚。只不知老師可是一家。”(儒林/7)

図4

以上の用例から、この「関係性」用法で表されている状況について図4のように図示を試みた。

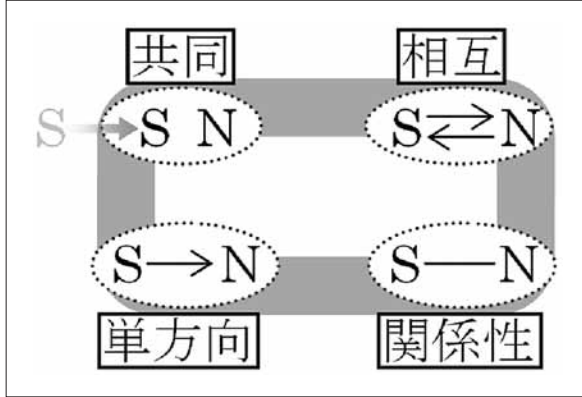
SとNをつなぐ線分は、位置や間柄といった関係性、つながりを表すものである。



3.5 4つの用法の意味的関連性

本節では、前節までで確認した4つの用法について、その意味的な関連性を比喻の視点から考察する。AからDの各用法について、図5にまとめて再掲する。

図5



これら4つの用法に共通することがらとして、各用法において点線で示した「述語が実現する場」に、SとNが共に存在する点が挙げられる。「A：共同」用法と「B：相互」用法は、述語動作が一人でも行える動作か、それとも、2人以上の動作主によって実現するものかという分類上の違いである。しかしながら、“S 和类虚词 N (V)”という表現形式で表される状況においては、SとNは、ともに同じ動作を行うのであり、その点では意味的な「類似性」が確認される。

そして、「C：単方向」用法は「B：相互」用法との意味的かかわりが強い。ここで(32)に挙げた用例を(58)に再掲すれば、この“和”はCの「単方向」として機能していると考えられる。

(58) 却不想玉樓在翫花樓遠遠瞧見，叫道：“五姐，你走這裡來，我和你說話。”金蓮方纔撇了經濟，上樓去了。(金瓶/19)

ここではSからNに対する「話しかける」という「単方向」の動作に焦点があるが、その後でNからもSに対して“説話”が行われるであろうことが容易に想定される。つまり、「相互」用法が成立するには、先ず「単方向」の動作の成立が不可欠であり、その点で、CとBは時間的な隣接関係にあると言えよう。

次の(59)においては、「目寄せをする」という動作が述語となっている。

(59) 妙在薛蟠如今不大来孝中應卯了，因此秦鐘趁此和香怜擠眉弄眼通暗号兒，二人假粧出小恭，走至後院說梯己話。(紅樓夢/9)

この例では、先にS：秦鐘からの「単方向」の働きかけがあり、N：香憐もそれに対して「応答」することで「相互」行為が完成している。

残る「D：関係性」用法は、SをNと比較したり、SのNとの関係性を述べたりするものである。前節でも確認した通り、これらの述語は形容詞や状態動詞である場合が多く、「静態」について言及する。A・B・Cの用法では、述語が具体的な動きについて述べるのに対し、Dは二者の関係性を述べるのみである。「動態→静態」という観点から見れば、A・B・Cの用法で表される動作が落ち着き、「状態」となったものがDであると言える。例として(21)と(57)を比較していただきたい。

(60：(21)の再掲) 胡屠户道：“…想着先年，我小女在家裏長到三十多歲，多少有錢的富戶要和我結親！我自己覺得，女兒像有些福氣的，畢竟要嫁與个老爺，今日果然不錯！”(儒林/3)

(61：(57)の再掲) 范進道：“方纔門人見過，他是高要縣人。回敝處周老先生是親戚。只不知老師可是一家。”(儒林/7)

この2例は異なる文脈ではあるものの、「親戚関係になる」場面と、既に「親戚関係である」ことを言う場面であり、前者は「相互」に関係が形成される「動態」であり、後者では「関係性」をいう「静態」となっている。

以上から、A・B・CとDは「動態——静態」の関係にあると考えられ、Dの「状態」としての要素がさらに進んだものが「連詞」用法である。

本節では、本稿で論じている4つの用法の意味的関連性について考察を行った。しかしながら、全ての用例が明確に分類可能なわけではなく、個別用例においては分類が困難なものや、複数の用法にまたがって使用されていると考えられるものもある。そういった例について、次章において検討する。その前に、次節では“與”が担う意味用法について考察する。

3.6 “與”の意味用法

本節では“與”の用法について、和類虚詞という観点に特化した整理を試みる。本稿で話題としている和類虚詞三種のうち、“與”は最も役割が多い。それは上述の馬貝加2002に確認される用法の多さからも明らかである。役割が多い要因は、“與”が動詞用法でも頻繁に用いられることにある。“與”の動詞用法について、趙大明2007では、動詞用法として三つ：①給予、②結交、親附（親附：親近依附）、③参加、參與（yù）を挙げる。このうち①と②について介詞用法との接点を検討する。

“S與N”という表現形式で表されるのは、本質的に次のような事柄であると考えられる。
 (62) 「S_x N」 → 「S N_x」

これは、Sが持っているxという要素が、Nへと渡ることを意味する。xには「具体的な物、行為、発話、意識……」が該当する。

次の図6は、“與”の動詞用法から介詞用法にいたる拡がりを示したものである。

図 6

用法	給予		結交、親附		
x (移動物)	物	行為	発話	意識	
用法	授与	受益	使役	挨拶 C 単方向	A 共同・B 相互 D 関係性
統語形式	S 與人 _モ	S 與人 V	S 與人 V	S 與人 V	S 與 N 述語
	SV 與人	S(把) _モ 與人 V			
既述の 用例			(26) (30)(31)	(27)~(29) (6)~(8) (15)~(18)	(1)(39)~(45) (48)

図6上に「網がけ」で示した部分が介詞用法のおおよその領域である。動詞用法では具体的な物がSからNへ移動しているが、介詞用法では発話や意識など、より抽象的な物がSからNへ向けて発せられている。

4. 複数の用法にまたがる用例

本章では、複数の用法に該当すると考えられる用例について考察する。

用法の重複については語用論的な要素からも考察が必要である。例えば(63)について、述語動詞は「閑坐」であり「A：共同」用法と分類するものの、実際にはそこで会話が行われていることが推測されるため、その点では「B：相互」という意味合いも含むものである。

(63) 王婆笑哈哈道：“…老身無事，常過去與他閑坐…”。(金瓶/3)

続く(64)では、一つめの“和”は「相互」としての意味合いが強く、B用法と考えられる。二つめの“和”については意味的には前者と変わらずB用法であるが、しかし“S和N”の後ろに“兩個”を用いて二者をまとめた表現としていることから、「静態」と見なしていると考えられるのでD用法とする。

(64) 李瓶兒又說：“那邊房子左右有老馮看守，你這裡再叫一個，和天福兒輪着，晚夕上宿就是，不消教旺官去罷。上房姐姐說，他媳婦兒有病去不的。”西門慶道：“我不知道。”即叫平安近前分付：“你和天福兒兩個輪，一遞一日，獅子街房子裡上宿。”(金瓶/20)

次の(65)は“與”フレーズが二種類の述語を導く例である。

(65) 却說黛玉同姐妹們至王夫人處，見王夫人與兄嫂處的來使計議家務，又說姨母家遭人命官司等語。(紅樓夢・程甲本/4)

述語の一つめは“計議”であり、「相互」的に実現する動作であるため、B用法と判断する。また、二つめの述語は“説”であり、これは「単方向」を表すためC用法であると考えられる。

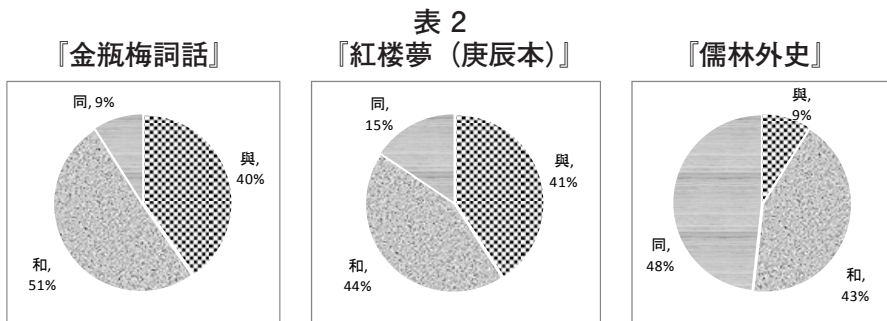
(66)では“同”フレーズが“商量”を導いているが、「私に相談をもちかけるように」という意味であるので、「B：相互」用法ではなく「C：単方向」の用法と判断する。

(66) 差人道：“賣箱子，還了得！就沒戲唱了！你沒有錢我借錢與你。不但今日晚裏的酒錢，從明日起，要用同我商量。我替你設法了來，總要加倍還我。”(儒林外史/13)

本章では複数の用法にまたがっている用例を検討したが、このような中間的な用法の存在こそが和類虚詞の高い汎用性を具現していると言える。

5. 役割分担

前章までの考察を踏まえ、本章では「和類虚詞はどのように役割分担をしているのか」について検討する。筆者は、本稿で提示した四つの尺度から、明清期の白話小説三種における使用状況について調査をおこなった。次の表2は『金瓶梅詞話』、『紅樓夢（庚辰本）』、『儒林外史』のそれぞれ1回～20回における用例数を示したものである。



三種の円グラフを比較すると、明清期の北方作品では“和”や“與”が優勢であり、清代南方作品では“同”や“和”が優勢である。一見すれば、前二作品における“與”の役割を『儒林外史』において“同”が担っているかのようである。しかし、表3にある通り、各用法の分布の内訳は複雑である。

表3

『金瓶梅詞話』(1-20回)における使用状況

	與			和			同		
	せりふ	地の文		せりふ	地の文		せりふ	地の文	
A:共同	5	16	21 (15%)	32	23	55 (32%)	9	17	26 (84%)
B:相互	16	22	38 (28%)	27	11	38 (22%)		1	1 (3%)
C:単方向	9	16	25 (18%)	32	3	35 (20%)			0 (0%)
D:関係性	23	15	38 (28%)	18	4	22 (13%)	1		1 (3%)
L:連詞	8	8	16 (12%)	8	16	24 (14%)	1	2	3 (10%)
合計	61 (44%)	77 (56%)	138 (100%)	117 (67%)	57 (33%)	174 (100%)	11 (35%)	20 (65%)	31 (100%)

『紅樓夢』庚辰本(1-20回)における使用状況

	與			和			同		
	せりふ	地の文		せりふ	地の文		せりふ	地の文	
A:共同	2	9	11 (10%)	14	15	29 (26%)	14	18	32 (80%)
B:相互	2	11	13 (12%)	7	7	14 (13%)		1	1 (3%)
C:単方向	3	6	9 (9%)	28	9	37 (33%)	1		1 (3%)
D:関係性	21	25	46 (44%)	8	3	11 (10%)	1	1	2 (5%)
L:連詞	2	24	26 (25%)	6	15	21 (19%)	1	3	4 (10%)
合計	30 29%	75 71%	105 (100%)	63 56%	49 44%	112 (100%)	17 43%	23 58%	40 (100%)

『儒林外史』(1-20回)における使用状況

	與			和			同		
	せりふ	地の文		せりふ	地の文		せりふ	地の文	
A:共同		1	1 (4%)	5	5	10 (6%)	31	34	65 (42%)
B:相互	3	1	4 (14%)	12	4	16 (9%)	15	17	32 (21%)
C:単方向	2	4	6 (21%)	14	12	26 (15%)	6	12	18 (12%)
D:関係性	14	1	15 (54%)	18	1	19 (11%)	16	2	18 (12%)
L:連詞		2	2 (7%)	20	45	65 (37%)	2	18	20 (13%)
合計	19 (68%)	9 (32%)	28 (100%)	69 (51%)	67 (49%)	136 (100%)	70 (46%)	83 (54%)	153 (100%)

表中の網掛けは、各作品内において縦軸で示した用法ごとに「せりふ／地の文」別の最多出現回数の用法をマークした。さらに、『金瓶梅詞話』および『紅樓夢』における“同”および『儒林外史』における“與”といった使用が限定的な介詞については当該の介詞における最多の用法をチェックした。例えば『金瓶梅詞話』における「共同」用法で用いられた介詞は、「せりふ／地の文」共に“和”が最多であり、また、同作品内において“同”は「共同」用法の「地の文」における使用が最多であったため、網掛けを施した。

端的に言えば、網がけされた項目の多さと当該の介詞の役割の多さは比例関係にある。介詞ごとに縦に見比べると、時代と地域によって傾向が異なることが明らかである。“與”については、『金瓶梅詞話』や『紅樓夢』ではAからDの用法が顕著に確認されるが、『儒林外史』では専らDの用法で使われる傾向にある。“和”は『金瓶梅詞話』や『紅樓夢』

では主に「せりふ」で全般的に用いられるが、『儒林外史』では「関係性」や連詞の用法で用いられることが多い。さらに、「同」は『金瓶梅詞話』や『紅樓夢』においては主に「移動を表す」述語と共に用いられるが、『儒林外史』では「相互」や「単方向」といった用法にも広く用いられている。

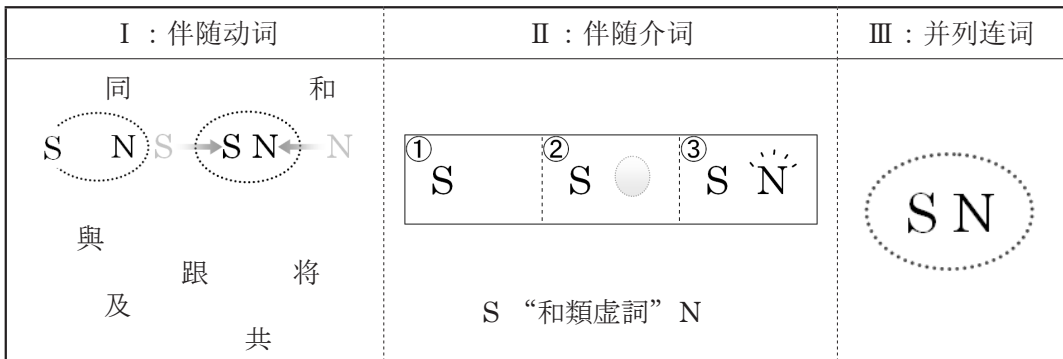
このように“與・和・同”は作品ごとに分業のバランスを変化させながら役割を補い合い「和類虚詞」を形成している。その内訳とは正に表3において網掛けを施した部分を主要素として分布している。

6. まとめ

本章ではここまでの議論について、さらに「一般化」をすすめ、本稿で考察した“與・和・同”といった和類虚詞がどのような意味を担っているかを検討する。前章までにおいて、和類虚詞のうち“與、和、同”が担っている意味について考察したが、呉福祥2003では“及、与、共、将、和、同、跟”などの和類虚詞は「伴随动词>伴随介词>并列连词」という変遷を遂げたとされている。“伴随动词”としての用法では、それぞれ人物を目的語としており、そして、虚化の進行、すなわち介詞用法としての発展に伴い、人物を導く働きのみで特化していったと考えられる。それこそが和類虚詞に通底する共通基盤であると思われる。

次の図7は呉福祥2003で示された和類虚詞の文法化モデルについて図示を試みたものである。

図7



I “伴随动词”に、それぞれ「SとNが一緒になる」という意味が含まれていることが和類虚詞の“语法化链”が成立する動機になっていると考えられる。

II “伴随介词”とは、Sと関連する何らかの人物や物の存在を示唆するものであり(②)、Nを導く(③)。和類虚詞が表しているのはここまでであり、その具体的な関わり方とは「一緒に座る・移動する／相談する／話しかける／関係性(静態)を表わす」など、「S和類虚詞 N」に後続する述語成分が決定するものである⁸。

III “并列连词”ではSとNが並んで存在する事物として捉えられている。

8 香坂1987では、介詞“和”の働きについて、「対象の設定」という表現を用いている(348頁)。

このような大まかな意味的基盤に支えられ、和類虚詞という一群の介詞群が形成されていると考えられる。

[参考語料]

- 《金瓶梅詞話》《全本金瓶梅詞話》(明・萬曆年間)、香港太平書局、1982年
《紅樓夢》(庚辰本)《脂硯齋重評石頭記》(乾隆二十五年(1760年))、沈阳出版社、2006年
《紅樓夢》(程甲本)《新鐫全部繡像紅樓夢》(乾隆五十六年(1791年))、沈阳出版社、2006年
《儒林外史》臥閑草堂本(嘉慶八年(1803年))、人民文學出版社、1975年

[参考文献]

- 于江1996a 〈虚詞“与、及、并、和”的历史发展〉、《上海大学学报(社会科学版)》第1期。
于江1996b 〈近代汉语“和”类虚词的历史考察〉、《中国语文》第6期。
赵金枝2007 《〈近代汉语“和”类虚词的历史考察〉质疑》、《语文学刊》第1期。
高育花1998 〈近代汉语“和”类虚词研究述评〉、《古汉语研究》第3期。
Liu Jian & Alain Peyraube 1994 History of some coordinative conjunctions in Chinese、Journal of Chinese linguistics, 22 (2)
吴福祥2003 〈汉语伴随介词语法化的类型学研究--兼论SVO型语言中伴随介词的两种演变模式〉、《中国语文》第1期；《语法化与汉语历史语法研究》、安徽教育出版社、2006年
馮春田2000 《近代汉语语法研究》、山东教育出版社
馬貝加2002 《近代汉语介词》、中华书局
傅雨贤、周小兵、李炜、范干良、江志如1997 《现代汉语介词研究》、中山大学出版社
许仰民2006 《〈金瓶梅词话〉语法研究》、中华书局
香坂順一1987 『《水滸》語彙の研究』、光生館
朱德熙1982 《语法讲义》、商务印书馆
曹炜2007 〈《金瓶梅词话》中“和”类虚词用法差异计量考察〉、江苏大学学报(社会科学版)第9卷、第2期
大内田三郎1987 『水滸傳』の言語——連詞「和・并・与・同」について——、『人文研究』第39卷第3分冊、大阪市立大学文学部
赵大明2007 《〈左传〉介词研究》、首都师范大学出版社